

## 人と自然の共生の試み

和歌山と長野の山間地を訪ねて

■評判の直売所 ■住宅オーダーシステム

和歌山県田辺市秋津野の「きてら」という直売所に行った。名前の由来は「来てね」の方言だそうだ。この周辺は山間地で桃やミカンの産地。店には野菜や果実が売られている。お隣には喫茶室。和歌山の木材を使った木造建築だ。すぐ近くには廃校になった小学校があり、こちらはレストランと宿泊所になっている。景観に配慮され地域の多彩な農産物を扱う「きてら」は素敵な場所だと評判を呼んで今や六万人が来る和歌山の名所になりつつある。

## 住民運動から

この建物ができたいきさつを尋ねたら住民運動から始まったのだという。都市部の人がこの地域に住宅を建てるようになって、地域のコミュニティのつながりが希薄になってきた。そこで地域を知ってもらおうということで農業体験や祭りなどが始まった。

そのなかでミツバチの学習があった。ミツバチの糞が干した布団につくというクレームが出始めたという。ところがミツバチは梅の受粉を助ける重要な役割をになっている。ミツバチがなくては梅の農家はなりたない。そこで学校と連携をして野菜づくりの農業体験やミツバチと果樹の関係など循環する仕組みの「食育」を始めたのだという。

それだけだとボランティアで終わってしまう。そこで栽培したものを販売してお客に伝える場を作ろうと意気投合した人たちがお金を出し合った。こうして学校の廃校を再生したレストランや梅やミカンやハチミツを売る販売所、そして山歩き、農業体験、加工体験、宿泊などの施設ができたのだという。

## 森林を守って

最近、もうひとつ感心したのが長野県下伊那郡の根羽村である。岐阜県との県境にある山間地で人口は1200名。世帯数442という小さな村だ。森林が92%を占めている。ここでは長野県内の飯田市や松本市の設計者や工務店と連携して、山林から木材、住宅建築まで行うというオーダーシステムを作りだし、これまでに2700戸の根羽村の木材を使った住宅が建ったという。昨年、一年間でも130戸のオーダーを受けたという。

それまでは木材は切りだして販売をし、売れるのを待つものだった。それを注文を受けて切り、それも要望にあった板や柱にまでするのである。

村にはかつて製材所が5か所あった。だが輸入木材の台頭で注文が減り閉鎖することになった。そこで最後の一つを村が買い取り、そこに最新鋭の製材の機械を導入して、注文に応じて木材を作るという画期的なシステムを築いた。これまでばらばらだった森林組合、製材所、工務店、設計家を一本につないだのだ。これによって、森林の間伐材の伐採、森林の管理、手入れが行き届くようになった。

施工主のなかには自分の家に使う木から見たいというので、わざわざ山に来る人も増えたという。そこで地元の木材をふんだんに使ったモデル住宅も建てた。次のステップは、製材から生まれた廃材を利用し、チップを使い、バイオマスへの取り組みをすることだと言う。

森を守るというのは、川下の川や海の資源を守ることだ。そこで、川下の町に呼びかけて、木材のオーナー制度や、子供たちの体験学習も取り組み始めた。山林や川の様子を観察や間伐の体験、森の仕組みを学ぶもの。

「今では、森林の循環の仕組みは川下の子供たちの方が詳しいくらい」とは町長さん。

今、人と自然の新しい共生の試みが地方から始まろうとしている。